

場は和やかな雰囲気、拙い英語ではあるが、多くの研究者とコミュニケーションをとることができた。

最後になりましたが、国際会議参加にあたり、援助いた

だきました、財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

the 4th EMBO meeting に参加して

京都大学大学院生命科学研究科 藤原奈央子

2012年9月22日から25日までの間、フランス・ニースのアクロポリスコンベンションセンターで開催された第4回欧州分子生物学機構会議 (the 4th EMBO meeting) に参加し、ポスター発表を行った。本会議は毎年一回行われており、主にヨーロッパを中心とした地域から、多岐にわたる分野の研究者が一堂に会し、活発に議論と情報交換を行う場である。私の研究対象であるRNAエキソソームと呼ばれるエキソヌクレアーゼ複合体は自己免疫疾患の抗原として知られ、この疾患がヨーロッパに多いという歴史的な背景のためにエキソソームに関する研究はヨーロッパにおいて先行している。昨年京都において開催されたRNAミーティング2011に参加した際、エキソソームの研究者間のつながりが大変深く、情報交換も密になされていることに驚かされた。現在私が行っている研究をより意義深いものにするためには、この研究に携わってきた研究者と私自身の研究内容について意見交換することが大変重要であると考え、エキソソーム研究者の多数集うと期待された本会議に出席した。

ミーティングはまず、ノーベル賞受賞者であるPaul Nurse博士のkeynote lectureから始まった。様々な肩書きを持たれて大変激務でいらっしゃるにも拘らず、シンプルではあるが大変効果的な系を用い、現在も素晴らしい研究をされていることに大きく感銘を受けた。その後plenary lectureへと続き、2日目以降はconcurrent sessionと

poster sessionも始まり、朝から夜までの活発なプログラムだった。個人的には2日目のplenary lecture 'RNA life—birth to death'での、Edinburgh大のDavid Tollervey博士による*in vivo* RNA crosslinkingと次世代シーケンスを組み合わせた出芽酵母におけるエキソソーム標的分子の網羅的解析についての講演が興味深かった。昨年のRNA meetingで研究室のポスドクの方が発表されていた内容をさらに発展させたものであり、かつ今回の会議と同時期に発表内容についての論文がpublishされている点は拔かり無く、流石と感服した。

自身のポスター発表については、会議自体が大きすぎたせいか、予想していたよりもポスターを訪れてくれた人数自体は少なかったが、以前から注目していたエキソソーム研究者であるMasaryk大のŠtěpánka Vaňáčová博士がかなり長い時間にわたって熱心に聴きにきてくれた。話し始めてすぐ、彼女がポスターセッション前にあらかじめ私のデータをしっかり理解した上でディスカッションに臨んでいることがよくわかった。エキソソームに関する一連の仕事を見て、素晴らしい研究者であると感じていた彼女が私の仕事にそのように興味を持ち、'Nice work.'と何度も言ってくれたことは現在の研究の方向性について大変自信になった。しかし、一方で残念なことに、私自身の研究内容についての活発な議論はできたが、彼女の研究内容や現在の興味についてはほんのわずかしき聞きだすことができなかった。限られた時間で満足のいく情報交換をするためにはもっと英語力が必要であることを改めて痛感した。また今回の会議では、poster cardという新しいコミュニ



写真1 学会会場 (Nice Acropolis).

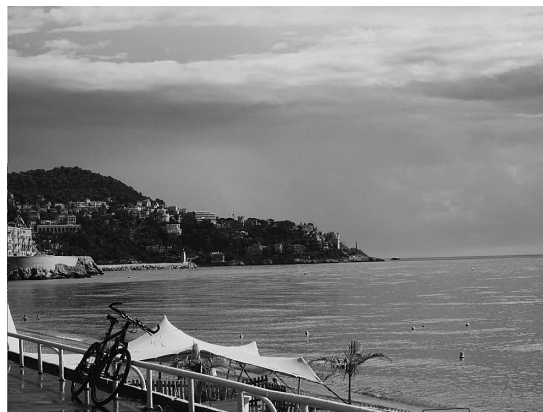


写真2 紺碧海岸として有名なニースの海。

ケーションツールの試みがなされており、発表者は自分のポスターを訪れてくれた人に連絡先と発表要旨の印刷された名刺のようなカードを持ち帰ってもらうことができた。私も聞きにきてくれた方々にはもれなくカードを渡し、訪れた先でも交換した。これは、研究者同士の交流には勿論、特にジョブハンティング中の研究者にとって大変便利な方法だと思う。

会議全体としてはヨーロッパ的なゆったりした空気は流れながらも、参加者には自身の興味の対象について精力的に情報収集しようという真摯な姿勢が感じられる素晴らしい

いものだった。さらにニースというロケーションも私には幸運だった。私にとっては初めての海外発表、かつ一人で海外に滞在するのも初めてという初めてづくしで、会議中はかなり緊張していたが、終了後の一日に周辺を散策するだけでも雰囲気のある町並みや紺碧の地中海を十分楽しめた。

最後になりましたが、本国際会議への出席にあたりご支援くださいました財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、お礼申し上げます。

第17回欧州生体エネルギー会議 (17th European Bioenergetics Conference) に参加して

京都大学大学院農学研究科 村井正俊

2012年9月15～20日まで、ドイツ・フライブルクで開催された第17回欧州生体エネルギー会議 (17th European Bioenergetics Conference, EBEC 2012) に参加しました。2年毎に開催されるEBECは、細胞のエネルギー代謝研究全般をカバーする学会であり、ヨーロッパ各国はもとより、日本やアメリカからも多数の研究者や学生が参加します (ただし、日本人は少数派)。会場となるフライブルク大学 (Albert-Ludwigs-Universität Freiburg) は、フライブルク市内の中心部に位置する総合大学で、古いヨーロッパの町並の中に大学の建物が何の違和感もなく立ち並ぶ姿は本当に見事でした。町と大学が壁もなく一体化しているのは、ヨーロッパの大学の典型的なスタイルらしいのですが…

さて、本会議のキーワードである「生体エネルギー (Bio-

energetics)」とは、ATP合成酵素やNADH脱水素酵素など、ミトコンドリアやバクテリア細胞膜上に存在する各種エネルギー変換酵素 (酸化還元酵素) やトランスポーターの基礎研究から、ミトコンドリアタンパク質が関与する疾病の医学的研究までをカバーする学問領域です。これらのトピックに関して最新の研究発表・討論が6日間に亘って行われました。討論の形式は、トピック毎にPlenary Lecture, Symposium, Poster Sessionの3つに分かれ、午前中は専門分野に関わらず参加者全員が討論に参加する形式のPlenary Lectureが行われ、午後からはそれぞれのセッションに分かれてのSymposiumおよびPoster Sessionが行われます。

今回私は、3日目の“NADH oxidase”のセッションで、「Characterization of the inhibitor binding site in NADH-ubiquinone oxidoreductase using fenpyroximate analogues」とのタイトルで、ミトコンドリアNADH-ユビキノ酸化還元酵素 (複合体-I) の阻害剤の作用機構に関する口頭発表を行う機会を頂きました。流暢とは言い難い私の英語力にも関わらず、発表後の休憩時間やその後のポス



写真1 トラムが縦横無尽に走るフライブルクの町並み。



写真2 会場のフライブルク大学。